

府障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7 11
府教育会館704号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

ようこそ府立障害児学校へ 小雨の中、新規採用者を温かく出迎え

任命式会場前宣伝

2016年度の府立障害児学校では今年度から大阪府に移管される旧大阪市立特別支援学校12校99人を含め、46の職場に371人の新規採用者が赴任しました。4月1日の朝、オリックス劇場(大阪市西区)で行われた、大阪府公立学校新規採用教職員任命式に際して、府障教は恒例となった出迎えの歓迎宣伝を行いました。年度初めの多忙な中、時折小雨も降る肌寒いあいにくの天気でしたが、11分會から約25人が参加しました。



「支援学校に着任される先生はいらっしゃいますか?一緒に学校に行きましょう。」任命式の会場前には、これら同僚となる新しい仲間をさ

がす参加者の声が響き、スーッ姿で緊張気味の初任者の皆さんを励まそうとする、温かい雰囲気での宣伝となりました。うまく赴任先の仲間に出会えた方は、さぞ心強かったのではないかと思います。顔見知りの参加者を見つけて、ホッとしようと言葉を交わす光景も、あちこちで見られました。

新年度の初日に仕事の手を止めて会場まで足を運ぶのはさぞ大変だったことでしょう。参加してくださった皆さんはもちろんです。職場に残って、参加者を送り出してくれた方々の



ご配慮に改めて感謝します。

昨年度に比べて大幅に新規採用者が増えた府立支援学校に加えて、府立高校・地域の小中学校の新規採用者も合わせると約2千人が集まる会場の入り口付近は、開場時間の9時30分をすぎるとかなりの混雑となりました。残念ながら、同じ職場の初任者とうまく出会えなかった分會もありましたが、各分會が目立つように工夫を凝らした手作りの横断幕のぼり等は、任命式の固い雰囲気を和らげるのに十分な効果を発揮したと思います。

任命式終了後、宣伝に参加した方々は、初任者と一緒に、年度始めの仕事が山積する職場へと向かいました。2015年度は、各分會の奮闘により、2014年度とほぼ同数の教職員が、新たに府障教に

加入しました。2016年度も、初日から新規加入の報告が複数の分會から届き、執行部も元気をいただいています。教育をめぐる状況が依然として厳しい中、新規採用の仲間たちが子どもたち一人一人にしっかりと向き合えて、持てる力を教育実践に集中できるような職場環境を作るためにも、引き続き教育条件の改善と、教職員の労働条件の改善をめざすと、とりくみが重要です。任命式での出会いも生かし、青年・ベテラン問わず、一人でも多くの教職員を府障教に迎えることができるように、今年度も創意あふれるとりくみを進めていきたいと思います。



新歓バレーボール大会

日時: 4月23日(土)
9時30分集合 10時開会
会場: 大阪府立堺聴覚支援学校
問い合わせ: 府障教青年部
TEL: 06-6765-8904

府障教ホームページアドレス <http://www1a.biglobe.ne.jp/fushou/>

Eメール アドレス : fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp



保育所に、入りたくても入れない待機児童問題が深刻です。国は昨年4月時点でその数を2万人超としていましたが、この中にはやむなく育児休業を延長している人や、これから仕事を探したい人の子どものカウントされていませんでした。厚生労働省は世論に押される形で、こうした子どもも含めた待機児を発表し、実際の数は6万人に上ることが分かりました。

大阪でも、昨年10月時点で3300人以上の待機児童がいます。吹田市ではこの春約1千人の児童が保育所入所選考から漏れ、インターネットで保護者が誘い合って市役所に集まり、市長に直接対応を求めました。

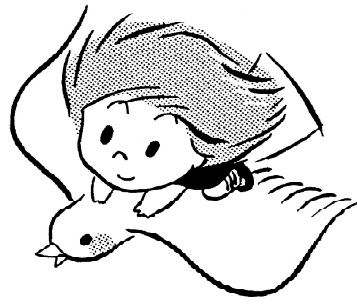
そもそも待機児童問題は、2004年に全国1万2358園あった公立の認可保育所が、10年間で約2千500か所も減らされたことから起こったものです。小泉内閣が、公立保育所への補助を廃止して、一般財源化したことがその大きな原因で、保護者には何の責任もありません。

しかし、安倍内閣が打ち出した緊急対策は、保育を手厚くしている自治体に対し、国の低い基準に合わせて、より多くの子どもを受け入れるよう要請することなどが柱です。加えて、市町村が関与しない無認可の企業主導型保育事業に、公費を投入しようとしています。こうした保育所は施設基準も劣悪で、子どもたちを危険にさらしかねないものです。

今求められているのは、大幅に減らされた認可保育所を緊急に建設すること、他職種より月額10万円低いと言われる保育士の賃上げです。子育てを応援しない政治を続けていてはすべての女性が輝く社会にはできません。

堺聴覚支援学校分会「ユース百済川通信」2016.2.22(発行)に掲載された原稿が府障教情宣部に寄せられました。執筆者の森訓分会長に確認させていただき、府障教「ユース」で紹介します。

卒業式・入学式「日の丸・君が代」に思う



今回も神奈川の話を書きます。今回はかつ井の話ではありません。父の話です。10年前に82歳で亡くなった父は神奈川出身なのです。父の父、要するに森の祖父が30何年前に亡くなってから、完全に音信不通になっていて、祖父の葬儀はなんとか会館で、いわゆる実家に行ったのは小学校4年生ぐらいで最後となりました。今回の神奈川への旅は父の足跡を少したどってみる旅でもあったのです。2日目の午前の学習会をさぼり、はるか昔のおぼろげな記憶をたよりに、父の実家を探してみました。町の様子も

昔と様変わりし、迷子になりながらも確かこの道だった。確かこの角を曲がったはずだったと1時間ほど探して、「あああれだ。あの家だ」というのを発見しました。小走りに家の前に立ち少し下キドキしながら、表札を見ました。そこには「J.FREDER I C」とありました。意気消沈しながら、まわりの家で「森」の表札を探しましたがありません。おそらく世代交代の中で家も変わってしまったのかと思われまます。しかし、この町の家は父が昔住んでいた家ではありません。父が昔住んでいた家、そしてその一帯は戦後アメリカに没収され、アメリカ軍の宿舎となってしまっているのです。そこも見に行きました。塀に覆われ、入ることは出来ず、ゲートではパスポートが必要なのだそうです。塀と高層の建物と高い木々だけが見え、寂しさばかりが募りました。思えば父は可哀そうです。父が3歳の

時、関東大震災がありました。その時父の母(私の祖母)は亡くなっています。いつも偉そうな態度をとる父でしたが、地震はとて怖いのです。当たり前です。そして、その後の日本は戦争へと突き進みます。父の高校も行く前にインターネットでどんなところか探してみました。横浜工業高等学校という学校名だけ知っていたのですが、調べてみて驚きました。旧制の高等学校で、今



「3.8 国際女性デー大阪集会」に参加しました

3.8国際女性デーとは、1904年3月8日にアメリカの女性が、参政権などを要求して行ったニューヨークでのデモに由来し、女性の完全な政治的自由をめざす国際的な連帯行動の日とされ、日本では1923年から行われています。今年の集会では、「戦争法前・戦争法後～私たちに何が出来るか～」というテーマで、弁護士金杉美和さんの講演がありました。

金杉さんは「憲法と法律の違いは何か？」と参加者に問いかけられ、憲法に縛られるのは、国会・内閣・裁判所・法律で、法律に縛られるのは国民であると説明されました。そして、自民党が2012年にまとめた「憲法改正草案」の内容が、「個人」の幸福という目的のために「国」を縛る憲法から、「国」の存続という目的のために「個人」を縛る憲法へ変えようとしているものであると述べました。それはつまり、「国」のため、「大企業」の利潤拡大のために、日本を戦争する国へ変えてしまう「憲法改正」だと強調されました。

金杉さんは、講演の最後に、今私たちができることとして、9月19日の安保法制(戦争法)の強行採決を忘れない 毎月19日行動、国民の怒りを政府に伝えること 2000万署名、夏の参院選で「戦争法」を強行成立させた勢力に勝つことだと提起されました。今、ここで食い止めなければ、この先止めることはできない、ということに不安な気持ちにもなりましたが、「一人ひとりが少しでもできることを積み重ね、思いを広め、みんなが繋がればまだ間に合う」と強く感じました。

(女性部 池側千加)



は無く今は横浜国立大学に変わっていたのです。驚いたのはそんな事を息子に一言も話さなかった事です。死んでから10年もたつて初めて父の事を偉いと思いました。父は高校を卒業して、満州鉄道に就職します。中国侵略のいわゆる拠点となるべく会社で、当時のエリート会社であつたそうです。しかし、すぐに日本は第2次世界大戦が開戦となり、そのまま中国で兵隊となります。父に戦争の事を聞いても、あんなひどい事はない以上に話さず、黙します。戦争が終わるのですが父はシベリア抑留となります。シベリアの話も聞いても同じです。「あんなひどい所はない」以上話さず、黙します。小聲で、みんな死んでいきよつた」とつぶやいたのを覚えているだけです。父が過ごした青春と呼べる日々は銃弾や砲弾暴力、飢えと寒さと死がうずまいていたのです。命からがら、帰国した父は森家自慢の早稲田大学学生の兄が学徒出陣で特攻隊となり南の海に消えた事を知らされまます。なんと悲慘で凄惨な時代だった事でしょう。父には強烈な怒りと自戒と反省が戦争に対してありました。2度と戦争を起さしやならんという強烈な思いがありました。父と同世代の人間は90歳を超えます。もう10年もすると、ほとんどいなくなつてしまっています。そして、時代は変遷していきます。戦争法案が可決したりするのは父の世代が無力化していった事と関係なくはありません。父がもし生きていければ怒鳴りまくっていた事でしょう。そして、父は生きて帰ってきたけれど、生きて帰ってこれなかった人々の声はどのような声なのでしょう。戦争法案に反対すると共に、「日の丸・君が代」の押しつけに断固反対します。

